

戦争法廃止・意思示す・自公を少数に



松井清さん

安達洋子さん(左)、吉野典子さん(右)

赤坂珠良さん

工藤岳さん(左)と妻

大城伸樹さん

国会開会日 総がかり行動 参加者の思い

戦争法の廃止と集団的自衛権の行使を容認する閣議決定の撤回に向け4日、今年最初の行動となった「戦争させない・9条壊すな!総がかり行動実行委員会」の1・4国会開会日総がかり行動。参院選の年を迎え、参加者はそれぞれの思いを抱いて列に加わりました。

少しでも声を

東京・高3男性

東京都内の高校3年生の男性(18)は今夏の参院選で投票する見込みの「18歳有権者」。1年ほど前から戦争法などへの反対集会に足を運んできました。「早く投票させてくれ、どずっと思っていた。ようやく有権者として自分の意思を示すことができる。楽しみです」
かつてはデモを見ても「怖い」「うるさい」としか感じませんでした。しかし安倍政権の強硬姿勢に「少しでも声を」と国会へ。「本当は勉強だけさせてもらえればいいんですけど」

戦争法に違和感

東京・大城伸樹さん

東京都大田区の会社員、大城伸樹さん(32)は昨年9月の戦争法成立を自宅テレビで見守りました。「そんなのありなのかよ、という感じだった」。法学部出身。「憲法解釈を変えるにしても、人権を守る方向でしかできないはず。絶句した。でも黙ってる場合じゃない」と振り返ります。
友人らの間にも、戦争法に違和感を持つ人が多いといいます。
「デモに来ない人の間でも、『あれは大変なことだったのではないか』という感覚がある。無関心な人が、どんどん減っていくように感じている」

忘れてはいない

東京・工藤岳さん

東京都中野区在住の工藤岳さん(32)は夫婦で行動に参加しました。「安倍政権の暴走は許せない。安倍首相は臨時国会は開かないし、『餅を食べたら忘れる』と言ったが、忘れてはいない」と怒りを込めて語ります。
印刷業で働く工藤さんは「秘密保護法で(業界は)萎縮している。政権を批判した本は出版できなくなるかもしれない」と危機感をにじませました。
参議院選挙については「熊本のような野党共闘はよかった。ああいう形が全国でも広がれば。選挙で自公を少数派に追い込みたい」と期待を込めました。

自分も一員に

東京・赤坂珠良さん

元会社員で起業準備中の東京都世田谷区の赤坂珠良さん(44)は昨年6月、国会で3人の憲法学者が戦争法案を「違憲」と明言したところから国会前などに足を運びます。
「自分に何ができるのかわからなかったが、多くの市民が運動に参加する『場』があったことで、自分もその一員になった」
あるシンポジウムで、首相官邸が毎日のデモ参加者数をチェックしているという報告を聞きました。「官邸はデモの動静を気にしている。実際に危機感を与えている。私も参加する意味がある」

言葉で対抗する

東京・吉野典子さん

安達洋子さん

東京都台東区の吉野典子さん(59)は、練馬区の友人の安達洋子さん(68)と一緒に参加。自作のパネルを掲げ、訴えました。さまざまな字体で印刷し、切り取った色紙や包装紙を貼り付けます。「去年5月ごろから30枚ぐらい作った。国会質疑を見ると、安倍さんは言葉を侮辱していると感じる。これに言葉で対抗しようと思った」
安達さんは教員時代、君が代斉唱時に起立しなかったことを理由に再雇用を拒否された経験があります。「こういう強制が学校で行われると、若者にとって、一人ひとりが学んで行動することの障害となる。主権者である若者も自分の頭で考えて行動し、一緒に戦争法廃止に向けて運動したい」

若者が頼もしい

東京・松井清さん

戦争法案審議中の夏ごろから国会前に来ているという東京都杉並区の無職、松井清さん(69)は、「アベ政治を許さない」と印刷した紙で包んだ帽子をかぶり行動に参加しました。
60年安保の当時は中学生。「当時は多くの主婦も運動に参加した」と振り返ります。「女性は家事をやっていればいいという時代。戦争を知っているからこそ、やむにやまれぬ思いで参加したのではないかと。同じ思いは今も感じる」と言います。
法案強行が迫り緊迫した昨年9月18日夜は雨が降る中、終電まで残り声を上げ続けました。松井さんは「若者が声を上げていたことは頼もしかった」と語りました。共産党が提案している国民連合政府提案については「絶対に必要だ」と語りました。